

曾丹集に、みわたせばこしの高根に雪つもりいさ白山のほどはいづれぞ、是は去ら山をこしの高根とよめる歟、

〔本朝續文粹十一〕白山上人縁記

敦光朝臣

白山者、山嶽之神者也、介在美濃、飛驒、越前、越中、加賀、五箇國之境矣、其高不知幾千仞、其周遙亘數百里、天地積陰、冬夏有雪、譬如葱嶺、故曰白山、夏季秋初、氣暄雪消、四節之花、一時爭開、側聞、養老中有一聖僧、泰澄大師是也、初占靈峯、奉崇權現、以降、効驗被于遐邇、利益及于幽顯、參詣其場之者、百日斷葷腥、來至其砌之者、二里禁涕唾、依信心之清淨、有感應之揭焉、

〔白山之記〕加賀國石川郡味智郷有一名山、號白山、其山頂名禪定、住有德大明神、即號正一位白山妙理大井、其本地十一面觀自在井、○中南去數十里、有高山、其山頂住大明神、號別山大行事、是大地

神也、聖觀音垂迹也、○中凡山爲體、不能委記、其峯口雲漢、其谷近水際、靈草異樹、不似人間、草木奇巖

恠石、誠爲神仙遊所、奇玄奇特、迄載盡、御在所東谷有寶池、人跡不通、唯有日域聖人、汲其水云々、其味

具、八功德云傳、雖風不吹、俄壘白浪、天晴靜者、忽放金光、或空中顯佛頭光、或谷現地獄相、是十界互顯、

善惡並現歟、太男知麓盤石上、有泉水、上道人受其水助喉、若初參輩、不知望此汲之者、尺水忽立大浪、

其水悉自石上振出、人見之大驚、發露□□者、忽水盈滿如元、

〔續後撰和歌集八〕雪を

安嘉門院甲斐

けぬが上にさこそは雪のつもるらめ名にふりにける越の白山

〔廻國雜記〕白山禪定し侍りて、三の室に至り侍るに、雪いと深く侍りければ、思ひつゞけ侍ける、

白山の名に顯はれてみこしちや峯なる雪の消る日もなし、下山の折ふし、夕だちし侍りければ、

ゆふだちの雲はしらねの雪げかな、これより吉岡といへる所にしばらくやすみて、